

人工知能の非「知能」的要素と社会的疑義

松浦 和也（東洋大学）

技術がわれわれのあり方を変容させうことは古来より知られていたし、技術がもたらす変容に対してあらゆる人々が期待や肯定的評価を寄せてきたわけではなかった。では、人工知能、特に第三次人工知能ブームの基礎であるニューラルネットワーク型システムに関し、この技術に固有であり、かつ哲学の文脈から発しうる社会的疑義にはどのようなものがありうるか。

本WSで提題者はひとつの筋道を示したい。「人工知能に責任があるか」という疑問についてはこのブームの中で様々な専門家が応答してきた。ただし、ここで責任概念の語義的分析を経由するならば、この疑問に対する有意義な応答は、人工知能の倫理が重視しがちな人工知能の能力、すなわち「知能」に留まらず、その構造や物理的特性にまで言及することで始めて可能になると思われる。そして、その構造と物理的特性は、人間を人工知能が代替できるという期待よりも、その期待に対する疑義を顕在化させる。